

〔歌林四季物語卷一〕正月 四方拜の神さびたる御事よ、○中天がしたゆたかに、國ひさしかれとの御うけひにて、ちはやぶる神の御心をとらせ給ふ事、御つぼくのあたり、みあらかのたゝずまひ、かにもりのつかさの、はゞきとりんにつかふまつり、けがれをやらひやるに、さゝやかなるわらはの、年たつ朝よろこびて、そこら塵なで、御このみのあまりうちやりたるを、のこにもあらで、はゞきつかうまつり、はしたなのうへわらはなど、鼻にかけて守るに、御まらすのかたすな、いものまうしの御かくどものすれば、うたまひのつかさ、なれたる上のきぬ引かけて、とのもりのきよめたらはしなど、聲ゆがみ老だつつかさこゝら行かふに、とかくして御わざことをはり、御ゆきならせおはしませば、御薬のつかさとうしあけつかうまつりたる、とそびやくさん、どさうさん、とうやくなど、宮内のかんのつかさ藏人につたへ奉れり、

〔日本歳時記正月〕元日、○中

除夜より歳を守りて寝ず、もし寝る時は、寅の初に起て新年をむかへ

盥洗し、髪を結、淨衣を著、○註禮服を著て威儀容貌をかいつくり、○中父母ます時は、父母にま

みえて、共に新年に逢事をよろこび、父母なき人は先祖の祠堂の前に侍候し、香を焼拜禮して、事

なく歳を迎る事を悦べし、○中食時に及で、雑煮を祖先考妣の靈前にそなへ、酒を獻ず、まかれど

も仕官の人は、今日拜謁の禮あり、仕へざる人も亦賀禮ありていとまなし、祭事に專にくはしき

事あたはず、明朝これを行も亦可なり、楊氏復は除日の前三四日に事を行ひしよし、文公家禮の

注に見えたり、○註さてみづからも雑煮を食し、屠蘇酒を飲て飯を喫し、温酒をのみ、又手洗口す

すぐべし、○中今朝卯の刻に起、食時にいたりて雑煮をくひ、冷酒をのみこと、昨朝のごと

し、又温飯を食し、温湯をのみべし、三日、今朝飯食する事、又昨日のごとし、元日より今日に至ま

で、雑煮を食し、屠蘇酒をのみ、奴婢も又まかり、

〔榮花物語卷十一〕長和三年に成ぬ、正月一日よりはじめてあたらしく、めづらしき御ありさまなり、